かながわ「いのちの授業」大賞
10 周年記念誌

いのち 学び つなぎ 10周年
いのちの授業大賞

神奈川県

神奈川県教育委員会

令和5年2月

「いのちの授業」大賞10周年記念誌によせて

神奈川県知事　黒岩 祐治

「いのちの授業」大賞10周年記念誌の発行に当たりまして、御挨拶申し上げます。

神奈川県知事就任以来、県民の皆様の「いのち」を輝かせることが最大の仕事だと決意し、県政に取り組んで参りました。

平成二十五年度に開始された「いのちの授業」大賞は、この度、十周年を迎えました。第七回からは、「ともに生きる社会かながわ憲章の部」も設けられ、偏見や差別がなく、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会の実現に向け、学校、家庭、地域で様々な「いのちの授業」が展開されております。

第一回の応募作品数は、一，九一四作品でしたが、第十回を迎える今年度は、一一，八二二作品が応募されました。「いのちの授業」が広がり、大人と子どもが一緒になって「いのち」の大切さを考える機会が増えていることは、とても素晴らしいことです。

本記念誌を手にして、これまでに大賞を受賞された作文を改めて読み返しました。子どもたちの作文からは学校や家庭・地域の様々な場面で、子どもたちとともに考え、語り合いながら、「いのち」の大切さについて思いを共有していく授業が展開されてきたことが伝わってきます。

また、今年度は作文のみならず、県内特別支援学校等での授業実践における絵画等、様々な形の作品が届くようになりました。

さらに各メディアにおいて実践校の取組が紹介される等、「いのちの授業」の広がりを実感しております。

みなさんにこの10周年記念誌をお読みいただき、これまでの歩みを振り返ることが、全ての「いのち」を尊び、新たな「いのちの授業」のきっかけや、さらなる「いのち」の輝きにつながることを願っています。

この十年間、「いのちの授業」の推進に御協力いただいた皆様に心から御礼申し上げるとともに、今後ますます県内に普及していくことをお祈り申し上げて、私の挨拶といたします。

あいさつ

神奈川県教育委員会教育長　花田　忠雄

「いのちの授業」大賞が、皆様のお力添えにより、こうして十周年を迎えることができますことに、心より感謝申し上げます。

各学校の実践に光をあてる「いのちの授業」の取組は、平成二十四年度から、かながわ教育ビジョンが提唱する「心ふれあう　しなやかな　人づくり」の理念に基づき始まりました。

さらに、平成二十五年度から、「いのちの授業」作文を募集し、すぐれた作品を「いのちの授業」大賞として表彰しております。

また、平成二十九年度には、学校向けの「かながわ『いのちの授業』ハンドブック」を、平成三十年度からは、毎年、家庭・地域向けの「かながわ『いのちの授業』ハンドブック概要版リーフレット」を発行して、各学校等に配付するとともに、県教育委員会のホームページに掲載するなど、取組の普及・啓発を図って参りました。

この度、十年間の歩みを振り返り、「いのちの授業」の更なる広がりを期待して「いのちの授業」大賞10周年記念誌を作成しました。

本記念誌には、平成二十四年度に黒岩知事が実践された「いのちの授業」の様子や、第一回から第十回までの大賞作文等を掲載しております。

この十年間で、子どもたちを取り巻く社会環境は大きく変化しています。そのような中、現在も続いているコロナ禍だからこそ、「ともに生きる社会かながわ憲章」の理念を踏まえ、「いのち」のかけがえのなさや、人への思いやり、互いに支え合って生きることの大切さ等について学ぶ「いのちの授業」のより一層の充実と推進が重要であると考えています。県教育委員会では、引き続き、県内への普及・啓発を図って参ります。

結びに、「いのちの授業」の推進のために、ご尽力いただいている、多くの関係の皆様に対しまして深く感謝申し上げます。今後も変わらぬお力添えを賜りますようお願い申し上げ、挨拶といたします。

目次

巻頭言

○「いのちの授業」大賞10周年記念誌によせて　黒岩　祐治（神奈川県知事）

○　あいさつ　花田　忠雄（神奈川県教育委員会教育長）

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

令和四年度　「いのちの授業」大賞受賞作文

○大賞　「みんなでまってるね」　近藤　紫万・・2

○教育委員会賞　「私の大好きなおじいちゃん」　伊藤　すみれ・3

○神奈川新聞社賞　「夜に輝くセミを見て」　加藤　巧海・・5

○ｔｖｋ賞　「使命」　山野　弥花・・6

○神奈川県ＰＴＡ協議会会長賞　「病気になってわかったこと」　鈴木　壮・・・7

○ともに生きる社会かながわ憲章賞　「一人一人の人権が尊重される社会へ」　渡邊　恵・・・8

○優秀賞　「今を、生きる」　石坂　まり・・9

○優秀賞　「母牛が教えてくれたこと」　堀内　桐子・・10

○優秀賞　「父への思い」　諸星　瑠花・・11

○優秀賞　「食べることは生きること」　村田　弘乃介・12

十周年のあゆみ　～各大賞作文とともに～・・・・・・・・・・13

第十回「いのちの授業」大賞イラスト等の紹介・・23

「いのちの授業」実践事例紹介・・・・・・・・・・・25

令和四年度『いのち』を大切にする心をはぐくむ教育推進研究委託事業実践報告・・・・・・・・・26

元気な学校づくり通信「はにい」・・・・・・・・・・・・28

はじめに

神奈川県教育委員会では、かながわ教育ビジョンが提唱する「心ふれあう　しなやかな　人づくり」の理念に基づき、「いのち」のかけがえのなさ、夢や希望をもって生きることの大切さ、人への思いやりなど、「いのち」や他者との関わりを大切にしながら、子どもたちにあらゆる人がかかわる百万通りの「いのちの授業」を展開し、心ふれあう教育の推進を図っています。

県内のすべての学校では、道徳科をはじめとして、各教科、総合的な学習の時間、防災教育、食育の指導など、あらゆる教育活動を通して子どもたちに「いのち」のかけがえのなさや、夢や希望をもって生きること、人への思いやり、互いに支え合って生きることの大切さなどを実感してもらう様々な「いのちの授業」を実践しています。

平成二十五年度より、県内の各学校をはじめ、家庭や地域等における「いのちの授業」の更なる充実を図るため、子どもたちが大人と関わる中で、「いのち」について感じたことや、考えたことを書いた「いのちの授業」大賞作文募集を実施しています。

令和四年度、「いのちの授業」大賞の取組が十周年を迎えるにあたり、「いのちの授業」10周年記念誌を作成しました。本記念誌には、今年度の各受賞作文をはじめ、これまでの大賞受賞作文や「いのちの授業」実践事例等を掲載しています。

本記念誌を通して、これまでの「いのちの授業」の取組を振り返るとともに、各学校における「いのち」のかけがえのなさや、互いに支え合って生きることの大切さを学ぶ「いのちの授業」のより一層の充実が図られ、さらに家庭や地域においても「いのち」について子どもたちと考える機会が増え、「いのちの授業」の実践が広がることを願っています。

令和五年二月

神奈川県教育委員会　教育局
支援部　子ども教育支援課長

大賞

みんなでまってるね

川崎市立金程小学校
一年　こんどう　しま

わたしが二さいのとき、おとうとの「たいち」がうまれました。たいちは、うまれてすぐ、はいにあながあいていることがわかり、にゅういんしました。でも、いまは、ウルトラマンやかめんライダーごっこがだいすきです。わたしのおかしもたべてしまうほどげんきいっぱいです。

ことしの六がつごろに、ままのおなかのなかにあかちゃんがいることがわかりました。すごくうれしかったです。

でも、ずっとままのげんきがないひがつづいて、しんぱいとふしぎでいっぱいになりました。あかちゃんは、どれくらいのおおきさなのかな。おなかのなかでなにしているのかな。まいにちままとあかちゃんのはなしをしました。

ままとわたしがつながっていたへそのおをみせてもらいました。へそのおでままからげんきをもらっていたことがわかり、ままに「ありがとう」といいました。

ままは、おへそからげんきをおくりながらわたしやたいちをたいせつにそだててくれました。

いまは、うまれてくるあかちゃんにいっしょうけんめいげんきをおくっています。びょういんでおなかのなかのあかちゃんをみせてもらったとき、あたまやあしがみえて、むねのところがピクピクうごいていました。わたしやたいちといっしょでいきているんだなとおもいました。

あかちゃんがうまれるまで、とてもながいじかんがかかります。どんなかおかな。おんなのこだったらうれしいな。いろいろかんがえるけど、いまはげんきにあえたらいちばんうれしいです。

だから、あかちゃんにてがみをかきます。

あかちゃんへ

はやくあいたいな。ままからたくさんげんきをもらっておおきくなってね。ずっとたのしみにまっています。にいには、いたずらがだいすきです。ままはおこるととてもこわいです。わたしとぱぱはとてもやさしいので、あんしんしてください。かぞくみんなであなたをまってるね。

教育委員会賞

私の大好きなおじいちゃん

中井町立中村小学校
六年　伊藤　すみれ

私のおじいちゃんは、私が生まれるずっと前にガンになりました。私が年長の時に一度だけ入院しましたが、退院してからはずっと元気なおじいちゃんでした。それでも、おじいちゃんの体には、あちこちにガンがありました。

今年の二月頃、背中にもガンが見つかりました。それが大きくなって、おじいちゃんの足の感覚はだんだんにぶくなってきました。それでも、治りょうやリハビリをすれば、きっと良くなる、と思っていました。おじいちゃんの口から、「もう治らない」と聞いて、とても悲しかったです。悔しかったです。テニスが大好きなおじいちゃん。私も運動が大好きなので、足が動かないって考えただけで辛くなりました。

おじいちゃんが毎日泣いている、とおばあちゃんから聞いて、私はおじいちゃんのために何かしたい、と思いました。クッキーを焼いて、家族で会いに行きました。

久しぶりに会うおじいちゃんは、家の中では歩行器を使って歩いていました。一緒にお散歩に行きました。お散歩には車いすで行きました。マンションにはエレベーターがついているので、一階までは車いすに乗ったまま行くことができました。その後、路上に出るまでに階段が五段あります。たった五段の階段を降りることがとても大変でした。おじいちゃんが手すりを持って体を支えている間に動かせない足を運んであげます。その時におじいちゃんが転んだりしないかと、とても心配になりました。用意しておいた車いすに乗れた時にはホッとしました。いつもはおばあちゃんが一人でお散歩に連れて行ってくれていると思うと、胸がぎゅーと痛くなりました。車いすのお散歩は思ったよりもずっと難しかったです。ちょっとの段差でもつまずいたり、坂道では早くすすんでしまったり、曲がりたい所でうまく曲がれなかったりしました。車いすに乗る人が不安な気持ちにならずにお散歩を楽しめるように考えながら、車いすをおしてあげることが大切だと思いました。

五月ころには病気はどんどん広がり、ほとんどの時間をベットで過ごすようになりました。おじいちゃんはおばあちゃんと二人暮らしです。ある日の夜おそく、おじいちゃんがベットから落ちてしまいました。おばあちゃんの力では持ち上げることができなくて、その夜、おじいちゃんはそのままゆかでねたそうです。そのことを、よく日電話で聞いた時とても悲しい気持ちになりました。はなれていても、すぐに助けに行ってあげたかったです。

次のお休みに、おじいちゃんに会いに行きました。みんなでぎょうざを作って、弟と私が焼きました。とても上手く焼けたし、何より、おじいちゃんが喜んでくれたので、本当にうれしかったです。

しばらくして、おばあちゃん一人ではおじいちゃんのお世話をするのが難しくなってきました。私の家におじいちゃんとおばあちゃんに来て

もらおう、と家族で話していましたが、それはかないませんでした。

おじいちゃんが入院することになりました。もうちりょうすることはできないので、病気から来る痛みで苦しまないための緩和病棟です。十二才以下の人は病室に入れません。それでもおじいちゃんの具合が悪くなった時、病院にお願いして、「ガラス越し面会」をさせてもらうことができました。学校の話や、習い事の話を喜んで聞いてくれました。運動会でやったとう立や、ブリッジを見せたら、手をたたいて笑ってくれました。帰り際、おじいちゃんに、「足は大切にしてね。」と言われました。今まで自分の体の事はあまり考えていませんでしたが、おじいちゃんを安心させたい、と思うようになりました。

最近のおじいちゃんは、ついこの前のことも忘れてしまうようになりました。いつか私のことも忘れてしまうんじゃないか、と思うとさびしいです。でも、おじいちゃんは私の心の中に大切な思い出をたくさん作ってくれました。もし、おじいちゃんが私のことを忘れてしまっても、私は絶対に忘れません。ずっとずっとおじいちゃんと一緒にいたいです。今はそばにいることができなくても、好きな音楽の話をしたり、学校や読んだ本の話をしたいです。おじいちゃんが好きな料理をたくさん作ってあげたいです。今までおじいちゃんがしてくれたことを、これからは私がしたいです。

大好きなおじいちゃんが、どうか、げんきになりますように。

神奈川新聞社賞

夜に輝くセミを見て

平塚市立真土小学校
六年　加藤　巧海

「ジージー」。夏の暑い日に、セミは鳴いています。小さな体で、家の中まで泣き声が聞こえるほど力強い声を出します。ぼくは、セミの生命力を感じたので、夜の公園に行き、セミの羽化を観察してきました。そこで、幼虫から成虫になる姿を目の前で見て、ぼくは、まばたきすることを忘れるほど、美しい姿にみとれました。また、一生けん命羽化する姿を見てセミの命の意味を感じることができました。

はじめに、セミの幼虫が土の中からはい出して、木の幹に向かって歩いている姿を見ました。幼虫の大きさはぼくの親指の頭位の大きさで、ぼくの背より高い所に登って行きました。人間でたとえると東京タワーの半分におよぶ高さです。ぼくは、小さな体で登る姿に、たくましさと、勇気と、あきらめない心を感じました。ぼくは、がんばれと心の中で応援していました。

次に、脱皮している姿を見ました。背中の部分のからが割れて中から白い体が出て、しだいにふっきん運動のように起き上がり全身が出てきました。まっくらな夜の世界に、青緑色にかがやく羽を下ろし無動で、ぼくは、「宝石のようだ」。と言葉がでました。羽化した姿は、エメラルドのようで、神秘的と表現する、ぼくが見た事のない本当の美しい姿でした。幼虫との姿の違いに感動しました。

セミは、幼虫として土の中で二～六年、成虫として地上で一～二週間の命と言われています。地上での短い期間、オスは大きな声で鳴く役割をまっとうします。今回セミを観察して、セミの生命力の強さと、一生けん命生きる姿を感じることができました。どんな生き物にも、命があります。先日、学校の授業で、命の尊さについて考えました。印象に残った話は、担任の母親が亡くなり、悲しくつらい思いをした話でした。ぼくは、道に落ちていた子すずめを保護した時、子すずめが亡くなってしまい、涙がボロボロ流れ悲しみを感じました。身近な生き物を失うだけでも悲しむ人がいます。セミも子すずめも人間も皆命があります。一生けん命生きている生き物たちのように、ぼくはいろんな事にチャレンジして、一日を大切に過ごしたいです。家族や友人、恩師、時間を大切にしたいです。なぜならば、一度の人生、ぼくは、たった一つの命です。この命が欠けたら悲しむ人がたくさんいます。命は生きること、そしてみんなの力で生きれていることを感じました。今回セミの羽化を見ることができて本当によかったです。また、セミは自分の力で成虫になりますが、ぼくは今でも自分一人の力では生きていけないです。お父さん、お母さんにありがとうと伝えたいです。

†vk賞

使命

南足柄市立岡本中学校
二年　山野　弥花

私は、死のうと思っている時があった。毎日部屋で泣いていた。そんなときに出会ったのが、〝推し〟の存在だ。その人は想像がつかないくらいに辛い過去をもっていて、それでも今を全力でがんばっているところに惹かれた。その人は歌い手で、たくさんのボーカロイド曲を歌っていた。その中に、「命に嫌われている。」という歌があった。その歌は、誰にも苦しいことを言えず、死ぬ勇気もない私のかわりに辛いことをさけんでいるようだった。そして、最後の歌詞は、「生きろ。」というシンプルなものだった。そんな簡単な言葉だけど、初めて聴いたときの私は涙がとまらなかった。コメント欄をみると、私と同じような気持ちをもつような人がたくさんいる、仲間がいる。それに気づいてさらに涙が出ていた。私は推しや同じ気持ちをもつ人たち、そして「命に嫌われている。」を作った人に救われた。

それから、のろのろと意味もなく生きていた私は、夢をもった。それは、誰かを救える歌を作る人になるというもの。医者は、体の調子が悪くて生きたくても生きられない人を救う仕事だ。でも私は、心の調子が悪くて生きたくても生きられない人を救う人になりたい。誰かを救える日まで、私は生きなくてはいけない。

神奈川県ＰＴＡ協議会会長賞

病気になってわかったこと

茅ヶ崎市立東海岸小学校
四年　鈴木　壮

ぼくは、昨年の四月から六月に入院をした。

じんぞうの病気がわかって、熱が下がらなくて、いろいろな薬を使った。入院している間は、とにかくつまらない。友達と遊びたいと思ったし、食べたい物が食べられなくて、もし退院したらラーメンを食べまくって・・・という想像がどんどんふくらんでいった。学校のみんなはなにをしているのかな。遠足に行ったりしているのかなと思った。五月に一回退院できたのに、また二週間したら熱がでた。まさかすぐに二回目の入院をするとは思わなかった。

手じゅつをしないとなおらないことがわかったから、七月に手じゅつをすることになった。どんな手じゅつなのかわからなくて不安な気持ちだった。手じゅつ室に入る時はとてもこわかった。おしっこがもれるようなきょうふを感じて、あいぼうのＥＴの人形をもって入った。六時間の手じゅつは無事に終わった。

その後の入院の間はきずがめちゃくちゃいたくて、二日間でプリン一つしか食べられなかった。夜でもいたみ止めの薬を飲みまくった。いたみがやわらぐから、夜中でもマンガをずっと読んでいた。

となりに入院していた六さいの男の子がいた。カーテンの向こうから話が聞こえてきてその子ががんと言う病気だとわかった。「秋に他の病院へ行ってちりょうを続けること」と「いつになったら退院するの？」とお母さんとしゃべっていた。四日間入院している間、その子とお母さんの話が毎日聞こえてきた。泣いている声も聞こえる。ぼくは、へその下のきずがいたくて、話をするのも辛かったけど、自分の病気は大したことないからがんばろうと思った。三日目、朝ごはんはたまご焼きとベーコンが出た。今までの朝ごはんの中でも、とんでもなくおいしく感じた。

今年の夏で手じゅつをして一年がたった。今でも手じゅつの時のきょうふをわすれない。病気をする前も命を大切にしてきたけど、今はもっと大切にしようと思っている。ぼくは病気になって、死ぬかもしれないと思ったときに、命の大切さがすごくわかった。命はさわれないし、見えない。でも、エネルギーのかたまりで、体を動かす原動力だ。だから今できることを最大げんがんばろうと思っている。病院でとなりだった子も元気になっているといいな。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

一人一人の人権が尊重される社会へ

三浦市立初声中学校
一年　渡邊　恵

私は道徳の授業で、「傍観者でいいのか」という物語を読みました。その物語は、人権について深く考えるきっかけになりました。私が思う人権は、一人一人が尊重され、意見を言える権利を持つことだけでなく、自分だけのことのほか、権利をもつことで、人を助けることだってできるということだと思っています。「傍観者でいいのか」という物語では、登場人物として、Aさん、Bさん、Cさん、クラスメイトと私が出てきます。Aさんは、Bさんの言いなりになってしまっていて、日に日にヒートアップする人権侵害と疑われるようなBさんの行動があり、平気でAさんをからかったり、命令したりするようになってしまいました。それを見ているクラスメイトの中には、Bさんと一緒にからかい、笑う人まで出てきてしまいました。一学期の終わり頃になるとAさんは、体調不良をうったえ、早退するようになってしまいます。放課後、掲示物をなおしていた「私」は、思いをつめたような顔をしているCさんに、「Aさんをこれ以上放っておけない。」と言われ、はっとしました。このことがきっかけで、休んでいるAさんの家に、Cさんが事情を聞きに行くと「いじめられるのはつらい。もう学校へは行かない。」と言い、Bさん達から言われたことを断ると、殴られたりしていることを、涙を流しながら教えてくれたそうです。この話に出てくる、見て見ぬふりをする人(傍観者)は、そのままにしていいのか、はやし立てる人(観衆)は、もっと状況を悪くしていいのか。人権侵害(いじめ)には、加害者だけでなく、たくさんの人が関わっており、一人一人、人間として生活する上で欠かせない、とっても重要で大切な権利や自由を、Aさんはおびやかされてしまっています。Bさんをはやしたてる人たちも、加害者だと思うし、絶対にあってはいけないことだと心の底から思いました。又、傍観者が、そのまま放っておくことは、意味を変えれば、見捨てているとも言えると思いました。目の前で友達がいじめにあっていたら、見て見ぬふりをするのではなく、助けてあげることが大切だと思いました。人助けは難しく、最初は怖いかもしれないけれど、人助けに失敗はないのではないかと思っています。だから、どんなに小さなことでも、人助けをしようと思いました。そして残念ながら世界はまだ、少なくとも一人一人の人権、全ての人が尊重され、意見を受け入れてもらえたりするような社会ではなく、人権をおびやかされたりしている人もいるということを、常に頭に入れておきたいと思いました。テレビのニュースを見ると、人種差別などは、まだ世界からなくなっていません。SDGSの持続可能な開発目標の一つには、目標十として「人や国の不平等をなくそう。」というものがあり、その目標達成のため、人種差別をなくそうとしている取り組みもあります。このような取り組みが始まると、一人でも多くの人に人権や自由が手に入り、人権をおびやかされずに生活してほしいという気持ちが、より一層深まりました。世の中でも、人権に関する取り組みも増えて行き、良い未来へ進んでいけているような気がして、素晴らしいことだと思います。

私は、この学習を通して、人権とは何なのか、人権の大切さ、重要さが身にしみてわかりました。そして私自身、加害者、観衆はもちろん、傍観者にもなりたくないと思いました。先程書いた通り、人助けは難しいけれど、支えてあげることができたり、相談に乗ることができたり、人によってそれぞれの助け方ができるということが分かりました。被害者にとって、少しでも気持ちが楽になるような世界や、全ての人の人権が尊重される、素敵な未来をつくっていくためにも、私たちに何ができるのか、など、よりよい未来のためにどうしたらよいか、「今」できることについて考えていきたいと思いました。

優秀賞

今を、生きる

伊勢原市立中沢中学校
二年　石坂　まり

私には大好きな祖父がいました。その祖父に病気が見つかったのは私が小学二年生になった頃でした。肺に癌が見つかり、あまりに突然で私はとてもおどろきました。ですが、まだ癌も小さかったので、治すことはできると聞き、あまり重く受け止めることはなく、その後も家族全員、いつもどおり、普通に過ごしていました。そんな日々もつかのま、祖父に癌が見つかり半年ほど経った頃、癌のレベルが上がり、今まで入院していなかった祖父も急きょ入院することになりました。そして私たち家族はお医者様からこう聞かされました。「余命は一年。」

それから、本当に月日がたつのが早かったです。私は小学四年生を終え、五年生となる前の春休みでした。私の大好きだった祖父の笑顔と自分までつかれてしまうような笑い声はどこへやら、祖父は、鼻に管をつけ、酸素ボンベで酸素を送らなければ、自分で息もできないほどに弱っていました。もうダメか、と思われた頃、病院で見舞いに来ていた私たちに話すこともやっとだという状態なのに、祖父は今にも消えてしまいそうな小さな小さな声でこう言いました。「家に帰りたい。・・・最後に家の・・・桜が見たい・・・。」と。お医者様も何かを察してくれたようで、家に帰すことをゆるしてくださいました。

そして、家族全員で祖父の家へ帰り、私は祖父をつれ、家の外にある桜のもとへ行きました。丁度、桜が満開の季節でした。「綺麗だね。」と言った私の横で祖父はただ桜をながめるだけで、何も言いませんでした。ですが、久し振りに祖父がほほえみました。

その翌日、私が朝起きた頃には祖父は天国へと旅立っていました。祖父は、「余命一年」と言われたあの日から二年半も生きました。祖父は最後まで一生懸命でした。手を握った時、その時の精一杯の力を振り絞り、手を握り返してくれました。そこから「生きたい」という祖父の切なる思いが見えたように感じました。

人は生まれたら、そこから死に向かって歩いていきます。ですが「生きたい」という思いは、人をこんなにも強くするのかと思いました。

いつか訪れるその日まで、この日々が一日でも多く続くよう願いながら、今を生きていきたいと思います。

優秀賞

「母牛が教えてくれたこと」

神奈川県立相原高等学校
一年　堀内　桐子

今年の春、私は第一希望であった相原高校の畜産科学科に入学することができました。他の高校には無い特徴ある学校生活に対して希望と楽しみな気持ちで胸がいっぱいでした。

入学して約一ケ月後、部活動体験を経て畜産部の牛プロジェクトに入部しました。初めてのことばかりでわからないことが多く大変でしたが、毎日が充実していました。入部して数日経った五月四日、運良く牛の分娩に立ち会うことができました。二次破水が始まって約一時間程で大きな子牛が生まれました。動画でしか見たことのなかった分娩を生で見ることができ、感動と嬉しい気持ちが込み上げてきました。それと同時に、今後の子牛への期待が大きく膨らんでいきました。その後、子牛はもの凄い速さで成長し、今では百キロを優に越えています。また以前から、先生方や先輩から夏は出産ラッシュがあると聞いていました。そのため、これからまた可愛い子牛をたくさん見ることができると胸を躍らせていました。この時の私は、出産には常に危険を伴うとあまり感じていませんでした。

そんなある日、ある一頭の母牛が二週間ほど早く深夜に早産してしまったのです。朝の管理で発見した時には、すでに子牛が亡くなっていました。羊膜に包まれている子牛と、頭だけが出ているもう一頭の子牛がそこにはいました。狭い牛房の床には母牛のもがいた足跡が残っていて、想像を絶する痛みがあったんだと心が苦しくなりました。分娩準備の整っていない中でたった一頭、夜中に痛みと戦っていたのを想像すると早産の前兆や異変に気付く事はできなかったのか？と自分の中に後悔する気持ちが大きくなりました。それだけに溜まらず、母牛が靭帯を損傷してしまい起立不能になってしまいました。母牛の横たわる姿を見て、どうして子牛だけでなく母牛までこの様な目に遭わなければならないのか？と次々に疑問と不安が胸に込み上げてきました。

数日後、先生から「様子を見て回復の見込みがないと診断された場合は、と畜場へ出荷することになる。」と伝えられました。ただ、一生懸命世話をし、できる限りのことを行えば治るだろう、と安易に考えていました。しかし、状況は良くなりませんでした。一週間経っても母牛は自立することができず、カウハンガーという牛を吊り上げる装置が無いと立つことができませんでした。そんな状態が続く日々に不安と焦りが積もっていきました。薄々気付いていましたが、八月二十二日にと畜場への出荷が決定してしまいました。自分ができることは、出荷当日まで母牛が過ごしやすい環境を作ることだけでした。そして、二十二日当日の早朝、運ばれていく母牛を見てこのような形で出荷するのは、とても悲しくとても悔しく思いました。

この日は私にとって、命と向き合う過酷さと経済動物の命について深く学ぶ機会となりました。日々の世話を真摯に取り組むことこそ、目の前の命を大切に扱うことになるのではないかと思いました。それが、最後の見送りの時に自分の悔いが残らないことにも繋がるものだと思いました。

優秀賞

父への思い

大井町立大井小学校
五年　諸星　瑠花

四年前、命の大切さを教えてくれたのは、祖父の死だった。私は、去年それ以上に大切な父を亡くしてしまった。祖父の時は、命は大切だなと思ったけど、父の時は、こんなにはやく人生が終わってしまうなんて、父の人生はなんだったんだろうという気持ちが強くある。自分の命がなくなったら自分だけではなく友達や家族も悲しい気持ちになってしまう。四年生で父を亡くす人はあまりいないと思う。母は、父が亡くなってすごく悲しんでいる。だから私は、父が生きている時にしなかった家のお手伝いを始めた。家のお手伝いをしんけんにやり始めてからみんなに、

「えらいね。」

と言われるけど、私はほめられるためにやっているのではない。母の役に立ちたいのと、父に、

「がんばれ。」

と言われているような気がしたからだ。父は、私のおるすばんの時、毎回電話をかけてきて、

「大丈夫？さみしくない？」

と言ってくれた。たまに、お仕事の休けいのときに帰って来て、お昼ごはんを一緒に食べてくれる父が、本当に大好きだ。

でも、父が死んでうらんだことは今でもない。それは、家族のために一生けんめい働いてくれたから。

私が生まれて一番うれしかったのは、母と父が、たん生日の手紙に、

「生まれてきてくれてありがとう。」

と、書いてくれていたことだ。それなのに、父とは九年間しか一緒にくらせなかったのが、一番つらい。

「また、一緒にくらしたい。もう一度最初からやり直したい。」

これが私の願いだ。私の人生は、本当に幸せだ。温かい家族に育てられて、兄はいろいろ物を買ってくれて、姉は恋の相談やテレビを見てくれ、母は信用してくれて、愛してくれて、父は、一番かわいがってくれる。うちの家族はみんなやさしさにあふれている。

父が亡くなって、私は、がまんがふえた。泣いてしまうと、母も泣いてしまう。だから最近、母もいない一人の時に泣くようにしている。悲しくなったら父の

「大丈夫だよ。」

の言葉を思い出して、自分の心を元気にしている。

私は、父のことをそんけいしている。子どものために、なんでも買ってくれて、みんなを愛してくれて、私は、しょうらい父みたいなやさしい人になりたい。うちの家族は、みんながんばりやさんで、それが父に似たところだと思う。父がワクチン後にたおれ病室へむかうと、なみだがたくさんあふれた。私は、父とすごした大切な時間や、父のやさしい笑顔を絶対に忘れないで、これからの人生を楽しく生きていきたい。

「パパへ、ママのことは、瑠花が支えるからゆっくり休んでね。大好きだよ。」

優秀賞

食べることは生きること

平塚市立港小学校
三年　村田　弘乃介

　ぼくのジジは、七月七日から入院をしていました。
「ジジ、ごはん食べたかな。」
「かんごしさんは、今日も食べてないって言っていたよ。」
ぼくは、毎日ママに聞いていました。七月十一日からジジは、食欲がないと言ってごはんを食べなくなってしまったそうです。そして、身体を動かすことができなくなってしまい、メールが届かなくなりました。
「ごはんを食べないジジなんてにせものだ。」
とぼくは思いました。
「ママ、ジジに会いたい。会わせて。ぼくがごはんを食べてってお願いをしたら、きっと食べてくれるから。」
いつだって、ジジはぼくのお願いをきいてくれます。ぼくは、はりきりました。
　ママは病院にたのんでテレビ電話をつなげてくれました。画面にうつったジジは、ほっぺたがへこんで別人でした。
「ジジ、ごはんを食べて元気になって。夏休みにいっしょに遊ぼう。」
こんしんの力でさけんでも、ジジは声を出してくれません。最後にうでを上げて、手をふってくれました。これは、まいったぞ、まるかわりだとぼくは思いました。入院してすぐは、学校の給食みたいな病院の食事の写真をとって送ってくれていました。
「病院のごはんは、おいしい。」
というコメントもついていました。ジジは、ごはんを食べることが大好きです。朝は、ぼくと起きる競争をします。ぼくは、早起きをすると一番好きなテレビを見ます。ジジは、ぜったいに朝食を食べます。それから庭に出て水をまき、野菜のしゅうかくをします。
　七月三十一日、ジジは死んでしまいました。水分の点てきだけで、二十日間いのちをつないでいました。一カ月の入院で病気は治る予定でした。
「ジジは何で死んじゃったの。」
何度もママにたずねました。病気のこともたくさん説明をしてくれたけれど、
「ごはんを食べなかったからかな。」
と下をむいて言っていました。そして、お茶わん山もりにごはんをよそって、だんごを六個作って死んだジジのまくらもとに置いていました。
　ママのいのちの授業は、納得できないことばかりでした。お医者さんとの話にも連れて行ってもらいました。大人四人が難しい顔をして首をかしげていました。ぼくは、大きな病院でも治らない病気があっておどろきました。ごはんを食べたい気持ちにさせる薬もないそうです。もうジジには会えないけれど、ジジが植えた野菜はすくすく育っています。ぼくは、苦手だったモロヘイヤも食べました。もうすぐサツマイモのしゅうかくです。庭の柿の実も大きくなってきました。ごはんを食べるジジの姿を思い出しながら、仏だんにおそなえをしようと思います。

第一回　大賞作品

いのちをいただきます

県立中央農業高等学校　一年　小柳　那奈

今回のブロイラーの解体実習は、私の中で世界が大きく変わるような「いのちの授業」でした。

私の通う農業高校の畜産科学科では、一年生のときにブロイラーを育て、解体するという授業があります。

初めてブロイラーと出会った日のことは、今でも鮮明に覚えています。段ボール箱から聞こえる鳴き声、手の平におさまってしまう小ささ、そして私を見つめ返すつぶらな瞳がとても印象的でした。それから毎日ヒヨコに会うのが待ち遠しくて、朝も夕方もまっ先に鶏舎に向かいました。

三週間が過ぎて、いよいよ一人一羽ずつの管理となり、ひとつの命を育てることの重みと責任を感じました。畜産を学ぶ者として、ブロイラーも家畜として見なければならないことは知っていましたが、私はそのブロイラーに「てばちゃん」という名前を付けました。

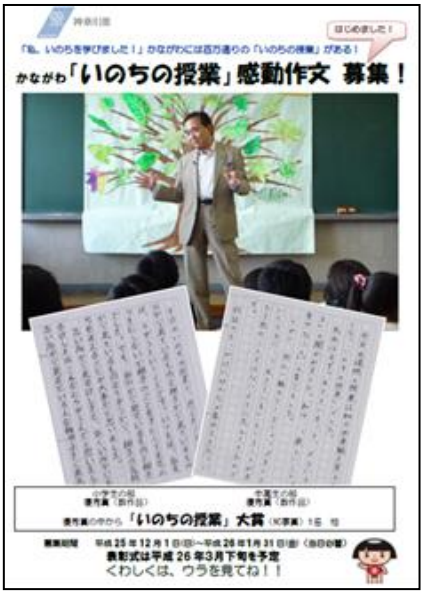
私は毎日、てばちゃんに会いに行って、エサなどの管理をしました。しかし、寒さの増してきた十一月のある日、てばちゃんは死んでしまいました。先生は寒さのせいだと言っていましたが、私は空っぽになってしまったケージを見ることができませんでした。

次の日、私は予備のブロイラーをもらいました。今度は絶対に命を無駄にしたりはしないと心に誓いました。

そしてあっという間にやってきた解体日当日。先生にと畜してもらうという選択肢もありましたが、私は自分でと畜する方を選びました。

と畜は、今までの人生の中で一番心が痛みました。でも、この経験から多くのことを学びました。命のために命をいただくこと、そしてそのために命を育てることの大変さ…。

命の重さをひしひしと感じたてばちゃんとの二か月間と、この「いのちの授業」を忘れず、感謝してこれからも命をいただきたいと思います。



2013年（平成25年度）をふり返る

・2020年夏季五輪・パラリンピック、東京開催決定

・福島第１原発、汚染水深刻に

・伊豆大島の土石流など自然災害で被害相次ぐ

第二回　大賞作品

大切ないのち

秦野市立南小学校　三年　柏　遥稀

「ドク、ドク、ドク。」

心ぞうの音が聞こえます。おなかの中の赤ちゃんが、生きている音です。

わたしは、花田先生がしてくださった「いのちのじゅぎょう」の中で、ちょうしんきでおなかの赤ちゃんの心ぞうの音を聞いたことが、一番心にのこりました。おなかの中の音なので、少し小さい音でした。その音を聞きながら、顔は見えないけれど、目の前に赤ちゃんがいるのだと思いました。何だかとてもふしぎなかんじがしました。生まれたら、もう一ど、赤ちゃんの心ぞうの音を聞いてみたいです。こんどはもっと大きくてしっかりした音が、聞こえる気がします。

わたしにも、六さい年下の妹がいます。その妹が、お母さんのおなかの中にいたとき、よくおなかをなでていました。すると赤ちゃんが、中からポコッとおなかをけったりすることがありました。まるで、おへんじをしてくれているみたいでした。それから、

「生まれたら、いっしょにあそぼうね。」

と、話しかけたり、家族で、赤ちゃんの名前を考えたりもしました。赤ちゃんのことを考えていると、とてもやさしい気もちになりました。この気もちが、「いのちを大切にする」ということなのだと、今は思います。しばらくして、妹が生まれました。はじめてだっこしたときは、あたたかいなと思いました。手も足も、わたしの手のひらで、すっぽりつつめるくらい小さくて、かわいかったです。わたしの人さしゆびを近づけるとぎゅっとにぎってくれました。妹が、生まれてきてくれて、とてもうれしかったです。

「いのちのじゅぎょう」をうけて、いのちを大切にして、けんこうてきな生活をおくりたいと思いました。また、いのちを大切にするということは、みんなのことを大切にすることだと思います。だから、これからは、もっと人にやさしくしていきたいです。

2014年をふり返る
- 長野、岐阜県境にある御嶽山が噴火
- 広島北部で豪雨に伴う土砂災害
- 青色発光ダイオード（ＬＥＤ）の開発で、赤崎勇さん、天野浩さん、中村修二さんがノーベル物理学賞を受賞
- 西アフリカのエボラ出血熱感染拡大

第三回　大賞作品

大切な、命

横浜創英高等学校　二年　山口　茉利

現代文の授業で「高瀬舟」を読んだ時、長尾先生の提案で「安楽死に賛成か反対か」というテーマでディベートを行いました。

私は安楽死に賛成でしたが、反対チームとしてディベートに参加することになりました。相手チームは調べてきた資料を元に的確な主張をしていて、私も共感したり納得したりしました。ですが、「もし家族にもう治ることのない病気を持った人がいたとしたら、経済的にも、精神的にも、いつまで看病して、支え続けることができますか？　延命治療は経済的にも精神的にも家族の負担になりませんか？」という問いかけをされた時、思わず涙があふれてきてしまいました。

私の姉は、脳に障がいをもっています。残念ながら、今の医療技術では治る見込みはありません。しかし、たとえ医者に治らないと言われても、希望を持ち、支え続けるのが家族という存在なのではないでしょうか？　私たち家族は、姉の看病や治療費を負担に思ったことはありません。負担だから治療をやめて、命を絶ってしまおうと思ったこともありません。今はまだ、短い面会時間の間に話しかけたり、一緒に食事をしたりすることしかできていませんが、私が大人になったら、これまでできなかった経済的なサポートもしたいと思っています。

人の命や死には、資料では説明できない、もっと大事なものがつまっているのではないでしょうか。それは、愛や悲しみ、希望……。「安楽死」などと難しく考えなくてもいい。まずは命の大切さや、死という言葉の重みを感じるだけでもいいと思います。ディベートを通して、姉への強い思いを再認識するとともに、さらに命一つの重みについて考えさせられました。これはきっと、家族だから。という一言で終わるものではありません。友達、先生、世界のどこかで姉と同じように苦しんでいる人、全員に言えることです。みんなにも気付いてほしいです。命の、大切さに。

2015年をふり返る
・戦後70年、安倍首相談話
・世界各地で過激派組織などによる大規模テロが多発
・日本人科学者、大村智さん、梶田隆章さんノーベル賞受賞
・ラグビーW杯で南アフリカに歴史的勝利

第四回　大賞作品

「福祉体験学習を通して考えた命の大切さ」

平塚市立旭陵中学校　一年　星野　章太

高齢化社会という言葉は、今、耳にしない日はないと思います。テレビや新聞では、こんな大変なことが起きているのかと思いながらも、自分にはあまり関係がないことだと思っていました。

この間、学校で福祉体験学習をさせていただき、僕は高齢者体験をしました。体の関節に重しを、目には視界をさえぎるゴーグル、耳には音が聞き取りにくくなる耳栓をしました。全てを装着した状態で、自分の日常と同じ動作をしてみると、体の不自由さに驚きながらも、今の自分には少し力もあるので、何とか体験を終えることができましたが、本来の高齢者の方々は、その力も少し衰えてきているだろうし、毎日が、この状態なのかと思うと、装着品をはずした後の体は軽くなりましたが心が重くなりました。

僕には祖父がいます。とても元気な祖父で大好きな尊敬する人です。祖父は周りの人にも若く見られる人で、その言葉をとても喜んでいます。僕は、今まで祖父に守ってもらっている大きな力を感じていました。そばにいると安心できる温かさを常に感じて育ちました。しかし、今回の疑似体験の設定が八十歳くらいと聞いてまた驚きました。僕の祖父と同じ年だったからです。

今の自分は何をするにも自分の体力基準で考えがちでしたが、この体験で、身近な元気そうな祖父は、やはり確実に自分とは違う日常での不自由さを抱えているのではないかと考えるようになりました。年を重ねていくことは仕方ないことですが、今の高齢者の方々も若くて、すてきな時代がありました。僕は、これからがんばらなければいけない者です。体験で学習した高齢者の方々の日常の不自由さを、身近な人から手助けしていけると自分の心も成長できるのではないかと思います。「歩くのが遅いな」「こんな荷物、なんてことないのに」ではなく、相手の立場になり、考えて行動できる人になろうと思いました。

2016年をふり返る
- 熊本で震度７の大地震発生
- 津久井やまゆり園で痛ましい事件が発生
- オバマ米大統領、被爆地・広島訪問
- リオデジャネイロ五輪、過去最多41メダル

第五回　大賞作品

命の授業について

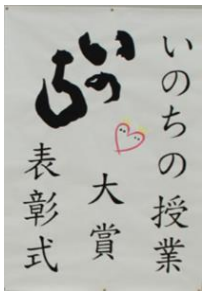
県立相模原総合高等学校　一年　小野　王海

私が、小学四年の頃、父親が病気で亡くなりました。私は、人生で一番の恐怖と絶望を感じました。その気持ちをふり返ってみると「悲しい」という言葉では表現できない程の感情です。「父親の分もがんばって生きよう」と思い、立ち直ったつもりですが、今も心の中で悲しんでいる自分がいるのを感じています。父親を亡くしてから更に家族を大事にする気持ちが強くなりました。ニュースで人が事故で死んだことや、殺されて死んだという報道を見るたびに、亡くなった人の身近にいる人の気持ちを想い、同情するようになりました。

父親は、私が小学一年の頃に病気にかかりました。四年間、その様子を見てきてとても苦しそうにしていて、母親が一生懸命、看病していたことはよく覚えています。三ケ月しか持たないと言われましたが、寿命を三年まで延ばすことができました。それでも最後に死んでしまいました。そんな出来事もあり、健康管理を大事にし、一日一日を大切に過ごさなければいけないことを教わりました。

命は人が生きるために必要で大事なものであり、儚いものです。生きているということはそれだけですごい事です。又、命は自分だけのものではなく周りの人にも影響します。父親の死によって私の生活や人生観が変わりました。私にとって母親は甘えるではなく、守りたい大切な人に変わりました。家の仕事は「手伝い」ではなく「分担」するのが当たり前という考え方になりました。他には、本を読んでいるときにそういった悲しい場面になると泣かずにはいられない自分になりました。

命はガラスのように失いやすく、やり直しが効きませんが、人に様々な影響を与えてくれるかけがえのないものだと私はそう思います。



2017年をふり返る
- 九州北部豪雨が発生
- 上野動物園でパンダ「シンシン」が５年ぶり出産
- 陸上男子100メートルで桐生祥秀９秒98を記録

第六回　大賞作品

お母さん大切な命をどうもありがとう

藤沢市立八松小学校　五年　島村　和奏

四年前、私の妹の命は生まれた。そのときのことを思い出したらまだ泣いてしまう。

小学校の入学式から数日後、お父さんから

「さいたまの学校に転校するよ。」

と言われた。私は、なんで？どうして？と色々な気持ちが混ざり合って、お姉ちゃんといっしょにたくさん泣いた。そして、一週間後にさいたまのおばあちゃん家に引っこした。

お母さんは、病院の先生から安静にするように言われたので毎日ベッドでねていた。私は、さいたまの学校に初めて行った。先生もやさしく、一年四組のみんなも支えてくれた。学校になれてきたころ、家に帰る時のおむかえがお母さんのお姉ちゃんだった。いつもは、おばあちゃんなのに、、、。わたしは「お母さんになにかあったのかなあ」と思った。家に帰るとやっぱりお母さんはベッドにいなかった。

「お母さんは出血をして、きん急入院になったんだよ。」

と、聞いた。私は、心配で心配でたまらなくて大泣きしてしまった。泣いても泣いても、なみだが止まらなかった。

お母さんは全前置癒着胎盤で入院した。全前置癒着胎盤というのは、胎盤が完全に子宮口をふさいでいて胎盤と子宮がくっついて離れない状態のことで、それはとてもめずらしいものだ。けれど、その時私は一年生だったのでよく分からなかった。とにかく、お母さんが家にいないことがとても悲しくてたまらなかった。

次の日、お母さんのお見まいに行ったらお母さんが車いすにすわっていて、私は固まって頭がまっ白になった。どうして、どうしてなんでお母さんがこんなことになっちゃったの。なんで、なんで。私は泣きそうになった。でも、お母さんもつらい思いをしているのにここで泣いたら、お母さんも泣いて悲しくなっちゃう。私は、なみだをこらえて歯をくいしばった。「これから、どうなっちゃうの？」私は思った。いろいろな気持ちでふくざつになった。

それから、お母さんがおばあちゃんの家に帰ってくる三ヶ月間、毎週のようにお見まいに行った。お母さんに会うのも楽しみだったけれど、おなかの赤ちゃんに話しかけるのも楽しみだった。でも、お母さんは手がふるえていてたいへんそうだった。私は、また泣くのをこらえた。これで死んでしまったらどうしよう。でも、きっとだいじょうぶ。私は信じ続けた。

お母さんがいない間、おばあちゃんは、がんばってくれた。私達は、たくさんの人に支えられた。とても悲しかったけど泣くと悲しい気持ちがふえるだけ。私は泣かずにがんばった。学校でも、家でも支えてくれる人がたくさん。人は、やさしい支えになると思った。

毎日、朝と夜にお母さんにメールをした。絵もたくさん描いて病院に持っていった。お見まいも、メールも絵もお母さんのことを元気づけられると思った。私は、これから出来るだけ泣かない。それもお母さんが元気になる。そう心の中で決意した。「悲しいことも、大変なことも、お母さ

んとみんなで乗りこえればだいじょうぶ。」私はそう思った。でも、一人で泣いてしまうこともあった。

いよいよ明日が出産の日。私はドキドキした。通学中、授業中とっても心配だった。『神様おねがいします。無事に出産が終わりますように。がんばれがんばれお母さん。』と、わたしはずっとずっと願っていたので学校でも、この日だけは勉強や先生の話に集中できなかった。ドッキドッキしながら、家に帰って、

「どうだった？？」

と、あわてて聞くと

「無事、出産したよ。」

と、おじいちゃんが言った。私は、まずホッとしました。次に、私は今日からお姉ちゃんだ！今日からお姉ちゃんになったんだ！やった！と、とてもうれしくなった。うれしくてうれしくてたまらなかった。

赤ちゃんは、一ヵ月半早くうまれてとても小さかったけれど、とても元気だったらしい。お母さんは、赤ちゃんの命を一生けん命守った。赤ちゃんを出産したあとも、まだ何時間も手術室にいてたくさん出血してたくさん輸血をしながらがんばった。知らない人たちのやさしさの血。色々な人のおかげで、お母さんの命は助かった。お母さんの体の中の血は全部、知らない人の血になった。私は、みんなの力で妹が生まれて、一人で出来ないこともみんなと協力すれば出来ることもある。お母さんも妹もがんばった。お母さんは、ニリットルのペットボトル三本も出血したそうだ。もし、輸血してくれる人がいなかったら、お母さんも、妹も亡くなってしまっていた。この、お母さんの出産のことから命の大切さを知った。そして、みんなの力で生まれた妹は、元気に育っている。私は命と心、人はつながっていると思った。みんなで守って生まれた妹の命。命は短いけれどとても大切。命が、なければいなくなる。妹の出産はとてもむずかしく大変だった。私は、泣いて泣いて泣きまくった。思い出したら、まだたくさん大泣きしてしまう。命のことについてすごく学んだ。命の大切さを。

みんなで守った妹の命はもう四才にもなった。生まれた時は小さく、でも今はとても大きくなった。命はとても大切にしなければならない。これからも、妹と母、家族を私は大切にしようと思った。私が大人になって出産する時は、まためいわくをかけるかもしれないけど、命はまた神様が見守ってくれることだろう。そして、命は大きく元気に育つだろう。お母さん、大切な命をどうもありがとう。

2018年をふり返る
・西日本豪雨、北海道地震、災害相次ぐ
・山口県の不明２歳児、大分県から駆けつけたボランティアが発見
・平昌五輪で最多メダル獲得

第七回　大賞作品

はじめてのカブト虫のしいく

平塚市立みずほ小学校　二年　二瀬元　佑樹

ぼくは、今年の夏、クワガタとカブト虫をかうことにしました。

さいしょは、お父さんとこうえんにバッタとキリギリスをつかまえに行ったんだけど、たまたま六ぴきのクワガタがいたから、つかまえてかうことにしました。

また、べつの日には、オスのカブト虫もつかまえることができ、さらに、友だちからメスのカブト虫をもらい、ぜんぶでクワガタ六ぴき、カブト虫のオスとメス一ぴきずつかうことになりました。

クワガタのおせわは、こん虫ゼリーをかえたり、こん虫マットの水のちょうせいをやります。

とくに、カブト虫は一ぴきでゼリーをまい日一つたべるので、まいかいかえなければならないし、こん虫マットもどのぐらい水をやるかしらべるのがまい日なのでたいへんです。

ある日ぼくは、クワガタとカブト虫をたたかわせて、カブト虫がひどいケガをしてしまいました。ケガをしたときは、かなしかったし、じぶんがわるいと思い、はんせいしました。

だけど、そのカブト虫がたまごをうんでくれました。ビックリしたし、うれしかったです。

たまごは、すごくデリケートだから、ちょっとしたことでふかしないので、大せつにあつかわないといけないです。

これからは、ストレスがたまらないように、いつもいじょうにしいくボックスをきれいにしたり、たたかわせてひどいケガをさせないよう、大せつにそだてたいです。

たまごもせい虫になって、ケガをしないよう大せつにそだてて、一ぴきでも長生きしてほしいと思います。

「いのちはかんたんなものじゃない、大きくても小さくても、おなじく大せつなものだよ。」

と、お父さんに教えてもらいました。

まい日、おせわは大へんだけど、クワガタになった気もちで考えたり、そだて方をべんきょうしたいと思います。

2019年をふり返る
- 天皇陛下が５月１日に即位、令和の時代が始まる
- 台風・豪雨で甚大被害（千葉、静岡、長野）
- 首里城火災、正殿など焼失
- ローマ教皇が38年ぶり来日

第八回　大賞作品

「ちがいのちがい」をべんきょうして

愛川町立中津第二小学校　二年　萱　世理奈

わたしは今日、学かつの時間に「ちがいのちがい」をべんきょうして、すきなものをすきでいいんだと思いました。

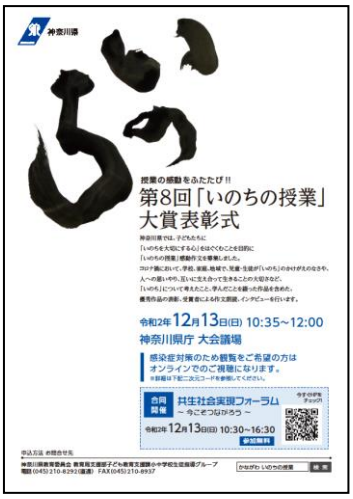
先生がテレビで、「あってもよいちがい」と、「あってはいけないちがい」のクイズをうつしました。友だちと話しあって、すきなものやとくいなことのちがいは、「あってもよいちがい」ということになりました。お花がすきな男の子も、プラモデルがすきな女の子も、それでいいのです。

でも、男だからおもいものをもつ、女だからりょうりをする、ときめるのは、「あってはいけないちがい」です。おもいものはカもちの人がもってあげればいいし、りょうりはとくいな人がやればいいんだね、ということが分かりました。

さいごに、いろいろなしごとをする人のしゃしんを見ました。わたしは、女のじえいかんががっこいいなと思いました。男の人たちの中でがんばっていてすごいし、日本のあんぜんのためにはたらきたいという気もちも、すてきです。

わたしは前からずっと、ドーナツやさんになりたいと思っています。大すきなドーナツで、おきゃくさんにえがおになってもらいたいです。男だから、女だからとちがいをつけずに、一人一人のすきなものを「いいね」と言ってあげることが大切なんだと思いました。

表彰式は、
オンラインで
中継しました。



2020年をふり返る
- 新型コロナウイルス猛威、初の緊急事態宣言
- 東京五輪・パラリンピック１年延期
- 九州で豪雨災害
- 「鬼滅の刃」大ヒット、さまざまな社会現象を巻き起こす

第九回　大賞作品

いのちについてかんがえたこと

川崎市立金程小学校　一年　向井　裕祐

ぼくは、「ぷう」というねこについてかきます。

ぷうは、おおきくて、かおがまるくて、はいいろのねこです。みんながぷうをみるとかわいいというくらいかわいいねこでした。いつもソファーにいて、かぞくがいるところにいてくれました。ぼくが「ぷー」とよぶと、いつもすぐきてくれました。むしをつかまえるのがとくいでした。

ぷうは、しんぞうのびょうきでびょういんにいきました。まだ3さいでした。ぷうは、じっとして、ごはんもたべず、げんきがありませんでした。ぼくは、ぷうとぼくのえがかいてあるおまもりをつくりました。

ねこは、うっとりすると、めを「ぎゅうーー」とつむります。それは、「すきだよ」のしるしです。ぼくもかおをちかづけてめを「ぎゅうーー」とつむり、「すきだよ」とつたえます。これをびょういんでもやりました。

ぷうは、しんでしまいました。とてもかなしくて、いまでもおもいだすとないてしまいます。

どうしてこんなにかなしいのか、ぼくはおかあさんとかんがえました。まだいっしょにいたかったからだとわかりました。

でも、いのちはずっといっしょにいられないということをぷうにおしえてもらいました。

でも、ぷうはいろんなところにいます。ぷうのほねは、おはかにいれずにいえにもってかえりました。ぼくたちがせいちょうするのをみられるようにです。ぷうのことをおもいだすと、てがみをかいてそこにもっていきます。ぷうは、ぼくのこころのなか、おもいでのなかにもいます。こころのなかやおもいでのなかでは、ずーーーといっしょです。

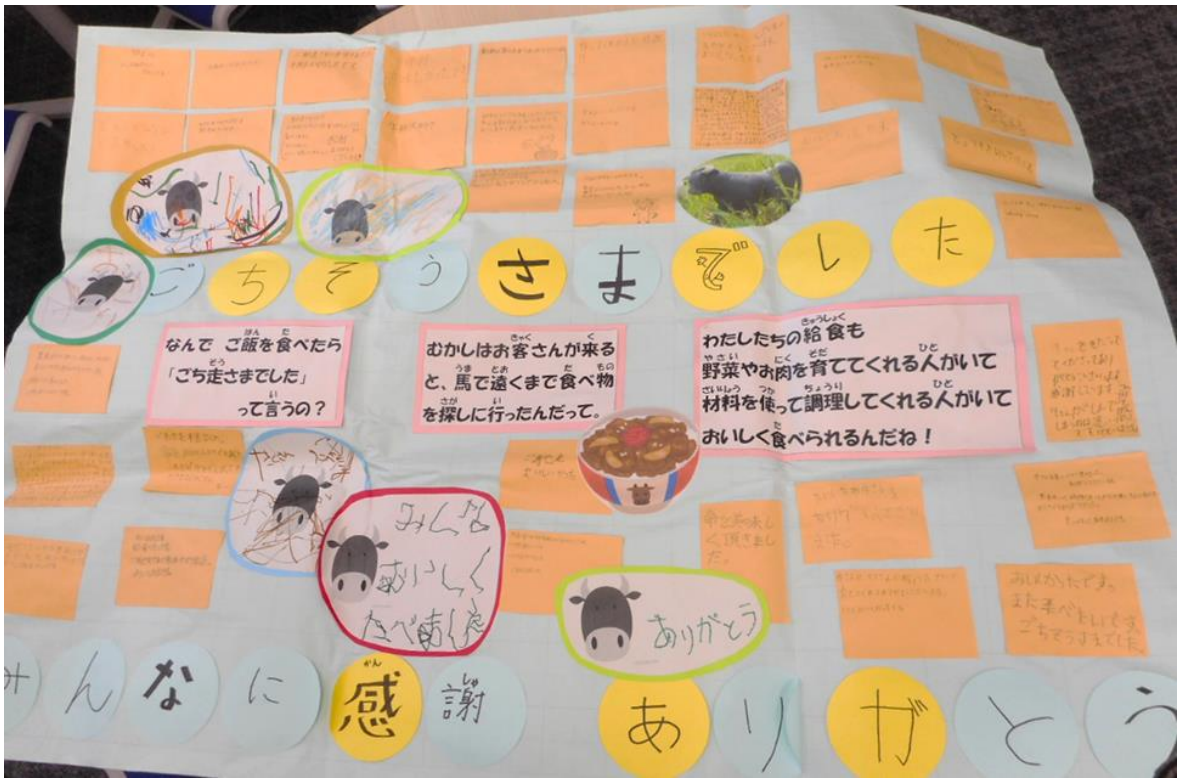
2021年をふり返る

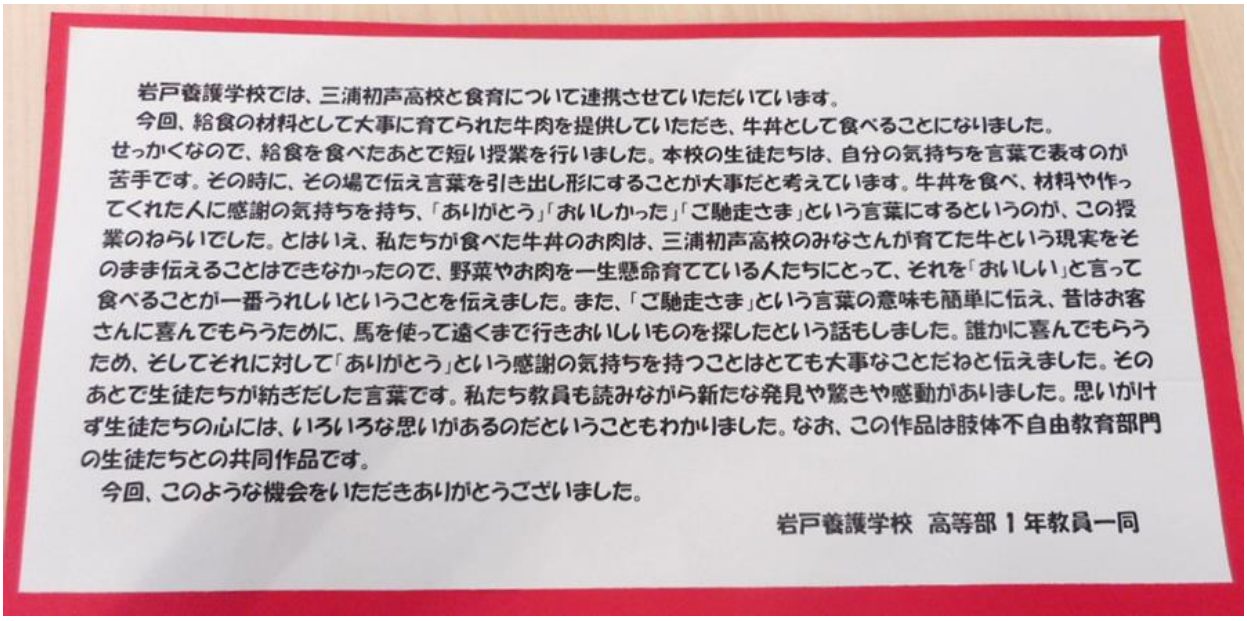
- 東京五輪・パラリンピック、１年延期で開催
- コロナ長期化、進むワクチン接種
- 熱海市で土石流災害
- 真鍋淑郎さん、ノーベル物理学賞受賞
- 将棋棋士の藤井聡太さん最年少４冠達成

第十回「いのちの授業」大賞　イラスト等の紹介

イラスト・ポスターの紹介

『いのち』に感謝し、みんなに「ありがとう」のメッセージの紹介





岩戸養護学校では、三浦初声高校と食育について連携させていただいています。

今回、給食の材料として大事に育てられた牛肉を提供していただき、牛丼として食べることになりました。せっかくなので、給食を食べたあとで短い授業を行いました。本校の生徒たちは、自分の気持ちを言葉で表すのが苦手です。その時に、その場で伝え言葉を引き出し形にすることが大事だと考えています。牛丼を食べ、材料や作ってくれた人に感謝の気持ちを持ち、「ありがとう」「おいしかった」「ご馳走さま」という言葉にするというのが、この授業のねらいでした。とはいえ、私たちが食べた牛丼のお肉は、三浦初声高校のみなさんが育てた牛という現実をそのまま伝えることはできなかったので、野菜やお肉を一生懸命育てている人たちにとって、それを「おいしい」と言って食べることが一番うれしいということを伝えました。また、「ご馳走さま」という言葉の意味も簡単に伝え、昔はお客さんに喜んでもらうために、馬を使って遠くまで行きおいしいものを探したという話もしました。誰かに喜んでもらうため、そしてそれに対して「ありがとう」という感謝の気持ちを持つことはとても大事なことだねと伝えました。そのあとで生徒たちが紡ぎだした言葉です。私たち教員も読みながら新たな発見や驚きや感動がありました。思いがけず生徒たちの心には、いろいろな思いがあるのだということもわかりました。なお、この作品は肢体不自由教育部門の生徒たちとの共同作品です。

今回、このような機会をいただきありがとうございました。

岩戸養護学校　高等部１年教員一同

第十回「いのちの授業大賞」のイラスト等の応募は六六〇作品となりました。

一人ひとりが伝えたい「いのち」の大切さが、イラストや掲示作品で表現されています。

今年度から始まったイラスト等の作品募集は、今後も継続して取組みます。

子どもたちの「いのち」への思いや願いを込めた新たな作品の誕生とともに、「いのちの授業」の可能性はますます広がっていきます。

紹介した岩戸養護学校をはじめ、横浜ひなたやま支援学校、藤沢養護学校のみなさんが、第九回「いのちの授業」大賞文集の印刷・製本を担当してくださいました。

過去３年間の「いのちの授業」実践事例数です

	幼稚園・ 認定こども園	小学校	中学校	高等学校・ 中等教育学校	特別支援学校	合計
令和３年度	92	894	434	323	83	1,826
令和２年度	88	801	386	256	58	1,589
令和元年度	87	874	410	321	57	1,749

令和３年度の「いのちの授業」実践事例を一部紹介します

地区等	学年	教科等	テーマ	内容
中	幼	環境	「うさぎの飼育」	園で 11 年ほど飼育していたうさぎが亡くなる。毎朝、園児当番が家を掃除したり餌をあげたり、低年齢児や保護者・地域の親子からかわいがられていたので、涙を流す子どもたちもいた。死んだらどこに行くのか、どのようにしたら葬ることができるかなどを話し合い、園庭の隅に埋めることになった。卒園児にまで知らせが届いたようで、お花や手紙も届く。最後のお別れ会を開き、思い出を共有する。保護者からすぐにうさぎの贈与をと声をかけてもらうが、すぐに新しい命という代替えは良いかどうか考え、見送る。９月より新たなうさぎをいただくことになり、みんなで迎え、命の大切さを話し合った。
川崎市	小５	道徳	「電池が切れるまで」	小学４年生の女の子の書いた「命」という詩を通して、命の大切さについて考えた。「電池はすぐに取り換えられるけど、命はそう簡単に取り換えられない。だから精いっぱい生きよう」という詩の内容から、行きたくても生きられない子がいることに気付き、自分の命について考えを深めた。「精いっぱい生きる」とは、どういう生き方なのか考え、意見を交流させた。「自分のやりたいことに一生懸命取り組む」や「自分の命も他の人の命も大切にする」など、これからの生活の仕方についても考えることができた。
県央	中１	総合	「助産師が伝える命の話」	助産師を招いて、「思春期の性」についてお話しいただいた。思春期の心とからだの変化、妊娠から出産までの経緯、生命の尊さ、望まない妊娠、性感染症、自分と大切な相手を守ることの重要性について講義を聞き、自分と大切な人を守る行動を知ることができた。まだ性について深く考えたことがなかった生徒も多くいたが、身近な問題であることを認識し、近い将来の自分のことと捉えられている様子だった。
県立	高１	保健	「心肺蘇生法」	授業前に生徒たちへ「目の前に人が倒れている状況に遭遇したらどうするか」という問いかけをしたところ、「そもそも何をしたらよいか分からない」「多少の知識はあるが行動を起こす自信がない」とほぼ全員が答えた。まず、座学で心肺蘇生法の手順を説明した。知識がある程度身についたところで、ダミー人形を相手にした実習に移った。この単元を学ぶ意義を伝え続けることで、生徒たちは集中して取り組み、互いの動きを観察しながら、アドバイスし合う姿も見られた。
県立	特別支援	生活	気象と自然災害「ぼうさい」	自然災害の驚異を知り、防災意識を高め、適切な避難行動がとれるようになるために授業を展開した。自然災害について、より理解を深めるために、天気や地震に関わりのある絵本をテレビモニターに映しながら読み聞かせをした。災害の模擬体験では、緊急地震速報の音を合図に机の下やトランポリンの上でシェイクアウトしたり、火災が発生したことを想定し、スズランテープや半透明のビニール袋で煙を再現し、煙ボックスの中を四肢這いで移動したりした。まとめの授業では、神奈川県総合防災センターに行って災害体験をし、防災意識や命を守る意識を高めることができた。

「いのちの授業」見つけた!!

神奈川県のホームページで「いのちの授業」の実践事例を紹介しています。
URL もしくは QR コードからアクセスしてみてください。

https://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/seitosidou/jissenjirei.html

令和四年度『いのち』を大切にする心をはぐくむ教育推進研究委託事業実践報告

県教育委員会は、市町村教育委員会、学校との連携・協力の下、「いのち」を大切にし、夢や希望、感謝の心をもって生きることができる子どもの育成を目指し、本事業を実施しています。

各学校においては、生きることの尊さや死の重さなど、様々な角度から「いのち」を大切にする心の育成をはぐくみ、全教育活動を通して進められる道徳教育を柱に、児童・生徒の実態や発達の段階に応じた創意工夫のある、「いのちの授業」を含む「いのち」を大切にする心をはぐくむ教育の推進を図っています。

令和四年度　研究推進校の取組の紹介

大和市立大和中学校　～ 自他を認め心豊かに生きる生徒の育成 ～

≪全生徒を対象とした講演会の実施≫

五月、「いのちの授業」の一環として、一般社団法人ＪＣＭＡ代表理事の吉井奈々氏を講師に招き、全生徒を対象にホールで講演会を実施しました。

演題は、「相手も自分も大切にするコミュニケーション」で、「自分を大切に生きること」、「相手も大切にしながらバランスをとること」、「自分の好きなことを大切にすること」、「命を大切にすること」、「幸せの基準は自分で持つこと」など、講師とのやり取りを交えながら生徒たちは語り合いました。

「私の中で、普通という言葉の意味が変わりました。私は今まで、普通とはみんなと一緒のことだと思っていました。自分の普通を相手に押しつけるのではなく、相手の普通を応援、尊重できる人になりたいと思いました」（講演後の生徒の感想）

≪広報「いのち」の発行≫

学校だよりと並行して、広報「いのち」を発行し、学校のホームページに掲載しています。

命を大切にする心は勿論、様々な「いのち」の捉え方がある中で、行動に移していくことが、大和中学校へ通う一人ひとりの生徒が充実した学校生活に繋がることになります。今年度は、学校だよりと並行して、「いのち」を発行していきます。それぞれの話題に対して、生徒のみなさんや保護者のみなさまと一緒に考えていきたいと考えております。記載内容は、先生たちからだけでなく、生徒会活動や生徒のみなさんの作品なども含めて発行していく予定です。（いのち　第一号より）

いのち　8号

令和4年6月14日
大和市立大和中学校
生徒会　本部役員

広報「いのち」は、大和中学校に関わる人たち誰もが発行できる「お便り」です。
今回は、生徒会本部役員のみなさんからのメッセージです。

拡大中央委員会での話を含め、生徒テーマへの想いをお知らせします。
みなさんと一緒に大和中をさらに素敵な学校にしていきましょう。

ありがとう

個性あふれる学校

つながる命　つながる愛

もっとありがとうを

○違いを認め合い、それぞれの存在を尊重していってほしい。
○一人一人の個性を表に出して、色々なものに触れることのできる学校にしたい。
○他人と違うことも恐れず、誇れることができるようにしたい。

○人に感謝する気持ちを忘れず「ありがとう」を言うことをあたりまえにしていってほしい。
○感謝し合うことで、感謝される行動をしていけるようにしたい。ほしい。
○「ありがとう」の輪を拡げ、笑顔が住む大和にしていってほしい。

○学校を大切にして、いじめのない学校に。
○親からもらった命を大切にしてほしい。
○みんな一人一人の命も大切にして生活していってほしい。

○家族には思いやりをもって生活していってほしい。
○自分と隣りの人を思う心を大切にして生活していってほしい。
○人の価値観を認めて、大切に思ってほしい。

会長から
皆さんからのアンケートを元に、我大中の委員会をはじめました。
何か一つでいいからやってみる。思ったより楽しくて、楽しかった。これからもどんどんみんなの意見を聞いて、楽しい学校にしましょう。

湯河原町立湯河原中学校

「人と人とが関わりながら生きていくために」～コミュニケーション教育の実践～

≪「湯河原町 ＡＣＴ 二〇二二」の取組≫

平成二十六年度から二十九年度までは「社会で人と人とが関わりながら生きていくために欠かせないスキルを身につける訓練」という広義な意味でのソーシャル・スキル・トレーニング（ＳＳＴ）として実施してきました。平成三十年度からは名称を「アート・コミュニケーション・トレーニング（ＡＣＴ）」というオリジナルな名称に変更し、「人と人とが関わりながら生きていくために」という主題を継続しながらも、湯河原町発のコミュニケーション教育のひとつとして実践と体系化を進めています。

ＡＣＴは、生徒一人ひとりの「コミュニケーション力の育成」をめざすワークショッププログラムを、次の三つをテーマとして実施してきました。

① 自分を好きになれる心を育てる → よりよい人間関係作り

② 友だちを理解し、好きになれる心を育てる → 集団の中で人間関係作り

③ 命を大切にする心を育てる → 命を大切にする、共に生きる心作り

湯河原中学校での取組は、「芸術を教える」のではなく、アートを媒体、あるいはツールとして用いることによって、生きていくための力を芸術体験から学ぼうとする授業です。そして、試行錯誤や紆余曲折そのものを、クリエイティブな行為として推奨しています。

元気な学校づくり通信『はにい』

はてなをつなぐ にーズをつなぐ いのちをつなぐ

かながわ元気な学校づくり通信

『はにい』

はてなをつなぐ　にーズをつなぐ　いのちをつなぐ

〈魅力ある学校づくり〉〈地域との協働〉　〈関連機関との連携〉

神奈川県教育委員会は、県内のすべての学校や地域に子どもたちの笑顔があふれることを目指して、平成二十三年八月「かながわ元気な学校ネットワーク推進会議」を設置し、「学びをつくる」「学びを支える」「社会とつながる」の三つの視点から、各学校の取組に対する支援を行っています。

「かながわ元気な学校づくり通信『はにい』」は、元気な学校づくりの一環として、平成二十四年五月に第一号が発行されました。これまで、各学校等で行われている様々な取組に関する情報を収集し、「日々の授業の様子」や「子どもたちの声」など具体の姿を発信してきました。

『はにい』の目的

「はにい」は、

・学校が元気になるよう・・・先生の仕事を受けとる。

・学校に携わる大人たちがしていることを受けとる。

・子どもたちの育ちを受けとる。

ためのコミュニケーションツールとして発行しています。

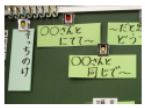
本通信を発行・活用することで、学校や子どもたちに、自らの取組みに自信を深めてもらうことや、他校の実践例をさらに取り入れてもらうこと、また、保護者や地域の人たちに、学校の教育活動や生徒指導の意義を理解していただき、さらに協力していただきたいと考えています。

県教育委員会では、多くの素晴らしい実践から、学校、保護者、関係機関・団体等、地域社会全体が一体となり、各学校・地域での取組がさらに充実していくことを願い、これからも発行していきます。

はてなをつなぐ　にーズをつなぐ　いのちをつなぐ

元気な学校づくり通信　第１号　神奈川県教育委員会

はにい　みんなのことば　2012. 5. 21.



4月、学習が始まったばかりの５年生の教室。黒板の端に、カードが貼ってあります。

「～だと思います」

「○○さんとにてて～」

「○○さんとおなじで～」

これはよくある、先生が提示した発言のお約束、みたいなものでしょうか。

学級担任の大脇先生に聞いてみました。

「いいえ、これは教師から出した言葉ではなくて、子どもたちが出してきた言葉です。この子たちにはこの子たちらしい発表のしかた、反応の言葉がありますから。」

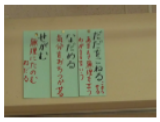
なるほど、みんなの言葉なのですね。この子たちらしい言葉がある。この子たちらしい対話の仕方がある。ここにはここの文化がある。

ところで、となりに貼ってある色の違うカードは？「そっちのけ」って書いてありますが。

「あ、これは、『日本語だけど僕たちはまだ使ってないようなことば』なんです。」

ああ、これも教室で出てきた言葉なんですね。

「はい、辞書で調べて、あそこにダダダダッて貼っていこうと思って。」



あそこ？ああ、ありました、ありました。まだ３枚ですけど、あれが並んでいくんですね。

「子どもに、先生なんであんな端っこなの、って言われたんですよ。まだ始まったばかりなので。夏までにあそこの柱までいきたいですね。」

「せがむ」「なだめる」「だだをこねる」

教師が子どもたちから受けとった言葉たち。この教室で子どもたちが出会った言葉たちです。言葉は文化。ここはこの子たちの文化センターになるのです。

「せがむ」「なだめる」「だだをこねる」

こうしてみて見ると、日本語っておもしろいですね。

――［はにいていすと］――

学習とは、「文化的実践への参加」である。（佐伯胖）

「みんなのことば」　第一号（平成二十四年度発行）

『はにい』といのちの授業

『はにい』は、「いのちの授業」に関連した内容について掲載しているものが多くあります。「いじめ」について考える教室、ともに生きる社会の実現のための交流、相手を思いやる気持ちを育む実践、自然から「いのち」を学ぶ体験など、各学校で取り組まれた「いのちの授業」が紹介されています。

これまでに発行された「はにい」は、神奈川県教育委員会のホームページに掲載されています。各学校で取り組まれた「いのち」を大切にする教育活動の軌跡をぜひご覧ください。

「いのち」に関連する「はにい」

はてなをつなぐ　にーズをつなぐ　いのちをつなぐ　http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f420082/
元気な学校づくり通信　第57号　神奈川県教育委員会

はにい　いじめ防止教室　平成25年11月28日

「気持ちをお天気に例えるとしたら、『晴れ』はどんな感じかな」
講師の先生の問いに、生徒が答えます。
「楽しい」「笑顔」「ハッピー」「あったかい」
「じゃあ、『くもり』は？」
「もやもや」「どんより」「暗い…」
「『雨』は悲しい」
「『雷』は怒り」
と続きます。

今日は「いじめ防止教室」です。
「いじめをする人の心の中はどんなかな」
「ストレスでいっぱい？」
「ストレスは誰もが感じるよね、それを解消する方法を何か持っていることが大切」
「僕は寝る」「私も」
「大声を出す」「あるある」
「スイーツを食べる」「いいね～それ」

「いじめ防止教室」
第五十七号（平成二十五年度発行）

はてなをつなぐ　にーズをつなぐ　いのちをつなぐ　http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f420082/
元気な学校づくり通信　第108号　神奈川県教育委員会

はにい　みんなけっこう違うね　平成27年3月12日

6月に幼稚園訪問をした授業の続きとして、今日は、幼稚園児を中学校に招いての交流会です。
「仲良くなるためにジャンケン列車をします」
「ジャンケンをして負けた人は勝った人の後ろに回って肩のところに手をやって…あっ？！届かないか！」
緊張気味の説明者を温かい笑いが包みます。
「俺たちデカイし。立ってると幼児が見えない」
誰かが言うと、どこからともなく中学生は順番にしゃがんでいきました。

「あぁ！こないだようちえんにきたひとだぁ！」
「覚えてるの？！すごい、嬉しい！」
「お名前は？」「○○○！」
元気に話しかけてくる幼児もいればそのそばで、じっと立っている幼児もいます。
「みんなけっこう違うね」

「みんなけっこう違うね」
第百八号（平成二十七年度発行）

はてなをつなぐ　にーズをつなぐ　いのちをつなぐ　http://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/seitosidou/hanii.html
元気な学校づくり通信　第167号　神奈川県教育委員会

はにい　「親切」にしたい気持ちはあるけれど…　令和3年3月26日

「思いやりの心と親切」ってなんだろう？

「今日は『思いやりの心と親切』について、みんなと一緒に考えるために、お友だちが来ています。」と、先生が人型のロボットを紹介します。
子どもたちは、歓声をあげ、笑顔で学級に迎えいれます。

※ Pepper社会貢献プログラム（Sof

特技である英語でのあいさつや、早口言葉を披露したロボット、「すごいでしょ～。でも、学校生活には不安もあるんだ。僕には苦手なことがあるから。分かるかな。」と、悩みを打ち明けます。

「水にさわれない。」「移動ができない。」と、子どもたちの声が飛び交います。
「みんなで手助けすれば、一緒に学校生活ができるよ。」「ロボットが苦手なことで困らないために、自分たちに何ができるかを話し合おうよ。」いつの間にか

「『親切』にしたい気持ちはあるけど…」
第百六十七号（令和三年度発行）

はてなをつなぐ　にーズをつなぐ　いのちをつなぐ　http://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/seitosidou/hanii.html
元気な学校づくり通信　第168号　神奈川県教育委員会

はにい　「海のいのちとふれ合う」　令和3年9月13日

「わぁ！こんな所に何かが密集してる。」「気持ち悪くて触れないよ！」
今日は、小学校3・4年生約40名が、近くの磯で「いのちの授業」を受けています。

「この危険生物は知っているかな？」
「ヒョウモンダコ！」「スベスベマンジュウガニ！」
講師の方からの質問に、子どもたちは、大きな声で答えます。

注意事項を確認し、いよいよ、生き物探しが始まります。
「先生！先生！ヤドカリがいっぱいいたよ！」
「あれ？なんかこのヤドカリちがうね。」カゴに入れ、講師の方に見てもらいます。
「ヤドカリもこの辺だけで数種類いるんだよ。」
「ヤドカリって1種類じゃないんだ。」目で見て、手で触れて、そのちがいを感じます。

「きゃー、ナマコから、卵が出てきた！」
「それは内臓だよ！身を守るための行動なんだって！」
10分も過ぎると、最初は気持ち悪くて触れないと言っていた子どもたちが、汗だくになって、大きな石をひっくり返し、様々な種類の生き物を捕まえています。

「海のいのちとふれ合う」
第百六十八号（令和三年度発行）

いのち 学び つなぎ 10周年

いのちの授業大賞

≪神奈川県「いのちの授業」関連資料一覧≫

・かながわ　「いのちの授業」ハンドブック
・かながわ　「いのちの授業」ハンドブック概要版
・かながわ　「いのちの授業」　指導資料
　　～いじめについて考える 小学校中学年～中学校編～
・かながわ元気な学校づくり通信「はにい」
・神奈川県教育委員会「いのちの授業」実践事例
・神奈川県教育委員会
　　～「児童・生徒の自殺予防に向けた　こころサポートハンドブック」～
・カナフルＴＶ　　いのちの授業～未来へ向かう生きる力～

神奈川県
「いのちの授業」ＨＰ
QR コード

かながわ　いのちの授業　　**検索**

http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f417796/

神奈川県教育委員会